

しらおか歴史物知りシート

No.1-3

こもれびの森・歴史資料展示室

【縄文人の土人形・土偶に込められた願い】

縄文時代の人々が作った土の人形を「土偶」と呼びます。特に縄文時代の後半(中期、後期、晩期)にたくさん作られるようになります。作られた時期や地域によって様々なタイプがあることもわかっています。

市内では、入耕地遺跡(白岡)、前田遺跡(実ヶ谷)、清左衛門遺跡(上野田・彦兵衛)など後期から晩期にかけて作られた規模の大きな遺跡から見つかっています。

土偶は、子供を宿した大きなおなかや乳房を誇張して表現するもの、またいわゆる妊娠線の表現を持つものなどが見られることから、女性を表現しているといわれることが多いのですが、「女性」というよりは、「妊娠・出産」など子孫の繁栄を象徴しているものと考えたほうが適切であると思われます。

市内から出土した土偶の事例を見てみましょう。

○ミミズク土偶

右の写真は、展示にも使用している資料で実ヶ谷の前田遺跡から出土したものです。丸い大きな目と同じくらいの大きさのイヤリングをつけている様子がよくわかります。顔を縁取るような表現がミミズクに似ていることから「ミミズク土偶」と呼ばれ、関東地方に多く見られるタイプのものです。欠けてしまっていますが、髪をいくつかに束ね、簪を挿す表現が見られることが多いことも特徴のひとつです。

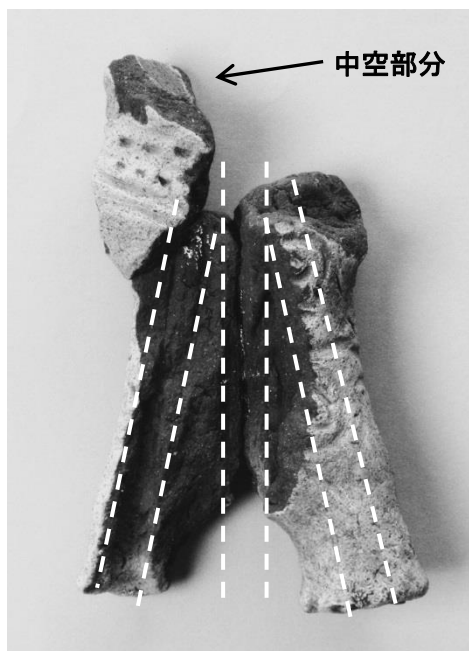
土偶は、なぜか壊されて出土することが多く、この資料でも両腕と下半身が欠けています。

○土偶の構造

写真のミミズク土偶は、厚さ1cmほどの板状に伸ばした粘土板をベースにして装飾を施していますが、もう少し新しい時期、縄文時代晩期になると、さらに立体的なものが作られるようになります。下の写真の土偶(入耕地遺跡出土・縄文晩期)は、胴体の中央と両足に棒状の心材を入れて作られていることわかる事例です。破線で示した3本の心棒が下半身から両足に入られています。また、胴上半は中が空洞(中空)となることもこの土偶の興味深いところです。心棒は、この部分の成形をしやすくする狙いと同時に、上部の中空部分と貫通させることで、乾燥時や焼成時の収縮による破損を防ごうとする意図があったのではないかと思います。



ミミズク土偶(前田遺跡出土・縄文後期)



足に心棒を入れて作られた土偶



筒形で中空の土偶 左：外面、右：内面

左の写真の土偶（入耕地遺跡出土・縄文晩期）は、筒形で中が中空になっています。心棒を入れた土偶と同じように、収縮による破損を防ぐために口とおなかに丸い孔が開けられています。

この土偶のおもしろいところは、顔の表現です。体部の装飾は線描き模様ですが、顔の輪郭だけ粘土を貼り付け浮彫りになっています。これは、「お面」を表現している可能性があります。縄文時代には、土で作った「お面」があることもわかっており、こうしたものの表現である可能性もあります。

○遮光器土偶

東北地方の縄文晩期に盛行する、いわゆる亀ヶ岡文化の生み出した土偶として有名なのが遮光器土偶と呼ばれるもので、細いスリットの入られた雪眼鏡状の装飾からそう呼ばれています。亀ヶ岡文化は非常に斉一性が高く、少しずつ変化しながらも周辺地域に強い発信力を持って広がっていきます。遮光器土偶もこの文化とともに広がりますが、このとき土偶の中を中空にする技術と一緒に広がって行きました。関東地方のミミズク土偶が中空となり、同時に大型化していく事例や前述の2例のような土偶が生まれるのも遮光器土偶の影響によるものです。

写真は、市内で出土した中空となる遮光器土偶の事例です。



左・中空となる遮光器土偶の胸部、右・中空となる遮光器土偶の肩から腕（清左衛門遺跡出土・縄文晩期）

中空となる土偶は、やがて弥生時代の「土偶形容器」と呼ばれる特殊な土器につながっていくと考えられています。この土偶形容器は、幼児骨が納められたり歯が納められたりする例が知られており、葬送儀礼や転生に関する儀礼などに関連付けて考える研究者もいます。

土偶がもともと出産や妊娠あるいは女性を象徴するものであるとすれば、転生や再生といった考えに置き換わることも納得できます。

このほかにも、土偶には様々な「不思議」が詰まっています。顔の付けられた遺物は、余り多くないだけに、その表情は何かを訴えかけているようにも思えます。

あなたには、土偶が見てきた縄文時代のお話が聞こえましたか？